

# 『源氏物語』 夕顔巻の教材化について ーテキストとの対話をめざしてー

井上 泰

教科書に採録されている『源氏物語』夕顔巻は、「なにがしの院」にて夕顔が物の怪に取り殺される場面が多い。本場面は、夕顔巻の「クライマックス」（新編註）と評されているように、想定外の物語展開や精緻な情況描写が読者を惹きつける。しかし、夕顔巻が読者に問いかけ、思考させようとしている場面は他にもある。また、源氏の君ではなく、夕顔に焦点を当てた読み方も可能である。そこで、本稿では、学習者が『源氏物語』をただ面白く読むだけでなく、テキストの問いかけや呼びかけを発見し、そこからテキストとの対話が行われることをめざして、『源氏物語』夕顔巻の教材化について検討する。

## 1. はじめに

本稿は、20 年度高等学校 3 年生を対象として行った「古典 B」（週 2 時間）の実践を踏まえて、『源氏物語』夕顔巻の教材化について述べたものである。

本当は実践報告としたいところであったが、今年度は年度当初の休校、また学校再開後も時間数や活動内容の制限、さらには、共通テストなどの受験を念頭において授業を進めたため、授業内で深く掘り下げて考えさせることがあまりできなかった。とはいえ、学習者は、それぞれ学び、考えていた。そうした学習者の思考をもとに、授業を振り返り、改めて教材化について考えることで、次につなげたいと授業者としては考えている。

次に「古典 B」の授業内容である。基本的には『源氏物語』を桐壺巻から読み進めるというかたちで行った。オンラインでの課題配布や実力テストの問題文などを含めて、四月から十月末までに、須磨巻までは読み終えた。そうした中で、本稿では対面で授業ができ、学習者の反応を見ることができた夕顔巻を取り上げる。

夕顔巻は、授業では主に次の場面を扱った。

①源氏、乳母の見舞いに行き、夕顔の咲く隣家に目をとめる

本文

六条わたりの御忍び歩きのこと、～「らうがはしき大路に立ちおはしまして」とかしこまり申す。

（新編日本古典文学全集『源氏物語』① 135 頁 1 行目～137 頁 8 行目。以下、本文引用には同様に新編全集の頁数行数を付す。）

②源氏、乳母を見舞う

本文

引き入れて下りたまふ。～尼君をもどかしと見つる子どもみなうちしほたれけり。（137 頁 9 行目～139 頁 10 行目）

③源氏、夕顔の家に宿る～源氏、夕顔を連れ出し、廃院

に着く

本文

白き袷、薄色のなよよかなるを重ねて、～（「明け方も～さるは、心もとなかめり。」は中略）～をかしく思す。（157 頁 7 行目～160 頁 5 行目）

④源氏、夕顔とうちとけつつ帝や六条御息所のことを思う／夕顔の死／源氏、今後自分の噂について思い悩む

本文

夕映えを見かはして、～（「右近は、ただあなむつかしと思ひける心地～千夜を過ぐさむ心地したまふ。」は中略）～をこがましき名をとるべきかな、と思しめぐらす。（163 頁 3 行目～170 頁 2 行目）

以上のように、源氏が夕顔の宿をみつけてから恋愛関係になり、そして夕顔が亡くなるまでが読めるように本文プリントを作成した。なお、夕顔巻を読む前に帯木巻のいわゆる「雨夜の品定め」中の、頭中将の体験談を読ませている。

また、学習者には、夕顔巻を読み終えて、「物語を通して、考えたこと」を書かせた。本稿で引用する学習者の意見はすべてこの課題で書いたものである。

## 2. 教科書における夕顔巻

上述のように、教材本文は独自に作成した。ここでは、教科書には夕顔巻のどこが採録されているのかを確認する。また、学習の手引の分析をし、授業でどのように読ませようとしているのかも確認する。

以下、採録の有無を確認できた教科書を一覧にしている。表記の工夫として、夕顔巻が採録されている教科書はゴシックにし、さらに☆印と通し番号をつけた。

●東京書籍（2 東書）

・『古典A』（古A301）（☆ 1）

・『新編 古典 B』（古 B329）

・『精選 古典 B 新版』（古 B330）

- ・『精選 古典B 古文編』(古 B331)
- 筑摩書房 (143 筑摩)
- ・『古典A』(古A312) (☆2)
- ・『古典B 古文編 改訂版』(古 B348)
- 桐原書店 (212 桐原)
- ・『新探究古典B』(古 B354)
- 数研出版 (104 数研)
- ・『改訂版 古典B 古文編』(古 B343)
- 教育出版 (17 教出)
- ・『古典文学選 古典A』(古 A302)
- ・『新編 古典B』(古 B309)
- ・『精選 古典B 古文編』(古B336) (☆3)
- ・『古典B』(古 B338)
- 第一学習社 (183 第一)
- ・『改訂 標準古典A 物語選』(古A314) (☆4)
- ・『改訂版 古典A 大鏡・源氏物語・諸家の文章』(古A 316) (☆5)
- ・『改訂版 古典B 古文編』(古 B350)
- ・『改訂版 古典B』(古 B352)
- ・『改訂版 標準古典B』(古 B353)
- 明治書院 (117 明治)
- ・『新 高等学校 古典B』(古 B347)
- ・『新 精選 古典B 古文編』(古 B345)
- 大修館書店 (50 大修館)
- ・『古典A 物語選 改訂版』(古 A315)
- ・『古典B 改訂版 古文編』(古 B339)
- ・『精選 古典B 改訂版』(古 B341)
- ・『新編 古典B 改訂版』(古 B342)
- 三省堂 (15 三省堂)
- ・『古典A』(古 A306)
- ・『古典B 古文編 [改訂版]』(古B333) (☆6)
- ・『精選 古典B [改訂版]』(古B335) (☆7)
- 文英堂 (109 文英堂)
- ・『源氏物語・大鏡・評論』(古A 304) (☆8)
- ・『古典B』(古B356) (☆9)

合計、9つの教科書に採録が確認できた。  
次に採録場面を整理すると次のようになる。

#### (1) 物の怪が夕顔を取り殺す場面

**本文** 宵過ぐるほど、少し寝入り給へるに、～あきれたる心地し給ふ。(164 頁 1 行目～168 頁 4 行目)

#### 採録教科書の通し番号と目次名

- ☆1 なにがしの院【夕顔】
  - ☆2 廃院の怪
  - ☆3 夕顔の死
  - ☆5 夕顔の死 (夕顔)
- ＊ただし、本文は「ただ冷えに冷え入りて、息は

とく絶え果てにけり。」(167 頁 8 行目) まで。

☆6 廃院の怪

☆7 廃院の怪【夕顔】

☆8 廃院の怪

(2) 廃院到着後、源氏と夕顔の交流場面

**本文** そのわたり近きなにがしの院におはしまし着きて、～げに、うちとけ給へるさま、世になく、所がら、まいてゆゆしきまで見え給ふ。(159 頁 8 行目～162 頁 4 行目)

#### 採録教科書の通し番号と目次名

☆4 夕顔

(3) 源氏が中秋の夜に夕顔に家に宿った場面および源氏が夕顔を廃院に誘い到着した場面。

**本文**

・八月十五夜、隈なき月影、～おぼめかしながら頼みかけきこえたり。(155 頁 9 行目～158 頁 5 行目)

・いさよふ月に、～をかしく思す。(159 頁 4 行目～160 頁 5 行目)

#### 採録教科書の通し番号と目次名

☆8 夕顔の宿

霧深き暁

(4) 源氏、乳母の見舞いに行き、隣家の夕顔に目をとめる場面および夕顔の歌を詠み源氏が返歌を贈る場面

**本文**

・六条わたりの御忍び歩きのこと、～「らうがはしき大路に立ちおはしまして」とかしこまり申す。(135 頁 1 行目～137 頁 8 行目)

・修法など、またまた始むべきことなど、～ありつる御隨身して遣はす。(139 頁 11 行目～141 頁 7 行目)

#### 採録教科書の通し番号と目次名

☆9 白き花・白き扇

夕顔の歌

以上、4つの場面に大別できる。そして、多くの教科書が廃院にて夕顔が物の怪に取り殺される場面を採録しているのがわかる。

では、(1)の場面ではどのような学習が想定されているだろうか。教科書に付された学習の手引には各社次のようにある(☆8は記載なし)。

#### ☆1

①光源氏の言動を、順にまとめよ。

②夕顔が「ただ冷えに冷え入りて、息は疾く絶え果てにけり」という様子であるのを見た光源氏の心情は、どのようなものであったか。

#### ☆3

1 夕顔は、光源氏の目を通して、どのように描かれているか。

- 2 廃院の不気味な雰囲気は、どのように描かれているか。
- 3 廃院での光源氏の行動と心情は、どのように描かれているか。

#### ☆5

- 1 光源氏の行動と心情を、時間の経過に従ってまとめてみよう。
- 2 夕顔の急死にまつわる怪異的な雰囲気がどのように描かれているか、抜き出してみよう。

#### ☆6 (☆7は☆6と同じ)

- 1 廃院の不気味さはどのようなところから感じられるか、話し合ってみよう。
- 2 夕顔の様子はどのように変化しているか、また光源氏はその原因をどのように考えているか、まとめてみよう。

学習としては、主に廃院の不気味さと夕顔の状態が刻々と変化していく様、そして、「物に襲はるる心地」がして目覚めた源氏が夕顔を失うまでの、その行動と心情の読み取りが想定されている。「写実的な状況描写」(新編註)とともに急展開に翻弄されていく源氏の心中を読み取り、「本巻のクライマックス」(新編註)が味わえるように設定されている。

次に(2)の場面についてみていく。学習の手引には次のようにある。

#### ☆4

- 1 「なにがしの院」の印象を、本文の描写からまとめてみよう。
- 2 隠していた光源氏の身分は、どのように明らかになっていったか、考えてみよう。

本場面は、例えば、新編註が「ゆゆしき」に「凶事の暗示はさらに強まる」と指摘しているように(162頁)、何も感じない源氏と不気味さを感じ続けている夕顔との対比が一層際立ってくる場面である。しかし、手引は、源氏と夕顔の恋愛関係の展開を抑える内容の読み取りの指摘にとどまっている。

続けて(3)の場面である。場面(3)は、二場面を読んだ後に、次の手引がつけられている。

#### ☆8

- 1 「夕顔の宿」はどのような様子であるか。また源氏は、それについてどう感じたか、話し合ってみよう。
- 2 「なにがしの院」に着いた夕顔はどう思ったか、またそれはどのような理由によると源氏は思ったか、説明してみよう。

物語の展開を抑えつつ、「なにがしの院」に着いた時の夕顔と源氏の感じ方の違いを読み取らせようとしている。これは先に見た☆4の「学習の手引き」の扱いとは対照的である。また、この読み取り方は、稿者も授業で行ったものである。次項で改めて詳述したい。

最後に(4)の場面である。

#### ☆9

- 1 「大弐の乳母」の家の隣家の様子に対する光源氏の興味はどのように深まっていくか、まとめてみよう。
- 2 「心あてに…」と「寄りてこそ…」の二首の歌のやりとりについて、どんな点が面白いのか、話し合ってみよう。

物語の序盤、夕顔に惹かれていく源氏の心中を読み取りの対象としている。

以上、教科書およびその手引から、夕顔巻の採録場面とその読み取り方について確認した。

### 3. 女君の「心細さ」を「をかし」と感じる〈男君〉

前項でみてきたように多くの教科書が採録している、夕顔が物の怪に取り殺される場面は、たしかに読み応えがある。夕顔が、「我がの気色」になってから、「息もせず」になり、「ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。」になり、「冷え入りにたれば、けはひもの疎くなりゆく。」になっていく詳細な様子は、源氏の認識や感触を通して語られており、あっという間に命が失われていく状況、そしてその時の源氏の心中を想起させる。

ただ、本場面をそのように読み味わって終わるだけという学習内容には、少し違和感が残る。それは、夕顔の命が失われているからである。ここまでの展開を振り返ると、夕顔は自邸を出立するのをためらい、「なにがしの院」についてからは、源氏にその心細さを訴えていた。もしそこで源氏が夕顔の気持ちを聞き、自邸に引き返していたならば、このようにはならなかったかもしれない。もちろん、六条御息所の嫉妬は、場所に関係なくあっただろうから、夕顔の自邸でも同様の結末を迎えていたかもしれないが。

しかし、「なにがしの院」についてからの夕顔と源氏のやりとりはやはり気になる。夕顔巻を通して、テキストが問題にしようとしていることがそこにはあるのではないだろうか。以下に詳しく見ていきたい。

まずは、注目する場面を引用する。「なにがしの院」到着後、源氏が夕顔に歌を詠みかける場面である。

「まだかやうなることをならはざりつるを、心づくしなることにも

ありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしののめ道

ならひたまへりや。」とのたまふ。女恥ぢらひて、  
「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ心細く。」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひの心ならひならんとをかしく思ふ。

源氏は、未経験の恋への高揚を詠み、夕顔は恋の行く末への不安を詠んでいる。ただ、それは単なる恋の不安ではなく、「うはのそらにて影や絶えなむ」とあるように、今後の展開、つまり夕顔の死をも暗示しているものである。そして、夕顔は明確に「心細く」と付け加える。

では、源氏の返事はどうだったか。源氏は、そうした夕顔の心情に気づいていた（「もの恐ろしうすごげに思ひたれば」）。しかし、その気持ちに打ち合うのではなく、「かのさし集ひたる住まひの心ならひならんとをかしく思ふ」と、建てこんだ住まいに慣れているせいだろうと推測し、そうした夕顔を「をかし」な（おもしろい／かわいい）ものと評していくのである。

この「をかし」の語は、大野晋編『古典基礎語辞典』（1356 頁。角川学芸出版、2011年）では、次のように解説されている。

ヲカシは平安時代の文学にさかんに使われた言葉で、大別して二つの意味がある。

A は「滑稽だ」「笑ってしまう」「変だ」などマイナスの観念を表し、相手や対象に優越の意識をもって対する場面に使われる。

B は「興味をひく」「おもしろい」「かわいい」「気がきいている」「美しい」などプラスの観念を表している。（中略—引用者。以下、中略は同じ。）

B の例が平安朝女流文学の散文に多く見られるのは、ことに平安朝の宮中に仕える女房たちが心に強くもっていた、万事に対する優越意識から、A の状態にある相手や対象に対して、いたわりや憐れみとかをまず感じる（それは共感を基礎とするアハレと見ることである）よりも、まず相手を見くだして、嘲笑の対象として「興味をひかれる」「おもしろいと思う」ところから発して、やがて相手・対象を「気がきいている」「評価に値する」ことに広がり、さらに「興味がある」から「美しい」までに発展したことによるものであろう。

本場面における「をかし」の意味は、辞典中の A か B かで考えると B であろう。源氏の夕顔に対する「プラスの観念」が表されている。しかし、『古典基礎語辞典』

が指摘するように、そのプラスの観念ももとは「優越意識」から出発する。そして、ここでも源氏の夕顔に対する「優越意識」は読み取ることができるだろう。上述したように、源氏は夕顔が心細く思う理由を、「かのさし集ひたる住まひの心ならひならん」と、市井の建てこんだ住まいに慣れ、広い屋敷に慣れていないからだと理解している。源氏は夕顔を自分の身分より低い、中流階級の暮らしに慣れた女性としてまなざし、そこにおもしろさやかわいらしさを感じているのである。ここに源氏の優越意識のニュアンスを感じ取ることができるだろう。

さて、このように夕顔が死に至るまでには女君の思いを受け止めず、優越意識やそれに基づくイメージで理解していく〈男君〉の姿が明確に描かれている。そして、その結果、夕顔の不安の方が的中し、夕顔は命を落とす。

不安がる夕顔を「をかし」と感じる源氏。そして、その理解が間違っていたものとなる結末。そこに書き手である紫式部は、どのような意味をこめたのだろうか。

それは、おそらくは女君（他者）の思いを受け止めず、自己の感覚のみで理解していく〈男君〉や、男君の女君に向けられた「をかし」というまなざしそのものを読者に問い直させるという意味がこめられているのではないだろうか。

一夫多妻制で、男性主導の恋愛・婚姻関係が常態とされている中で、『源氏物語』は、女君の思いを受け止めず、「をかし」の感覚で理解し、結果、女君の命を失わせてしまう〈男君〉の姿を読者に提示している。そこに源氏のような〈男君〉の在り方を批判的にまなざし、読者にこうした〈男君〉はどうかと問いかけようとする言語行為主体（作者）を読み取ることは可能だろう。

さて、上述のようにテキストを理解した上で、授業では、夕顔の「心細く」の言葉を、源氏が「をかし」と捉えたことについて、「をかし」の意味に注目させて考えさせた。

学習者の感想には、次のようにテキストが差し出す〈男君〉の姿をきちんと理解しているものがみられた<sup>4)</sup>。

身分差について考えさせられた。中将や源氏から見れば、夕顔は同じ人でありながら、自分より絶対的に「下」の存在だと思っているように感じた。雨夜の品定めでの中将の口調はどこか他人事で上から目線な感じがしたし、源氏も暗闇の中怖がる夕顔を特に気遣う様子もなく「かわいい」と言っている。もっと夕顔に寄り添ってもいい気がするが、そうしないのは自分は夕顔より「上」の存在で、その関係もどこか遊びの範疇を出ないからなのかなと思った。（波線は引用者。以下同様。）

また、次の学習者は、本場面の「書かれ方」に注目し、

さらに他の場面の描写もふまえて、紫式部の意図について考えている。

女君がずっと不安がっていて歌や様子にあらわれているのに、源氏はそれをずっと「をかし」と思っていたり、詠んだ歌は恋の発展への期待感にあふれていて、二人の気持ちの差がどんどん広がっているような書かれ方をしていたが、それは後に女君の不安が、ある意味当たって、女君が亡くなってしまう事への伏線になっていると考えた。また、一つ疑問に思ったのはそのように源氏が楽観的だったせいで女君が亡くなり、その後は女君を心配するのかと思えば自分の評判ばかり気にするような誰かからみてもひどい男として書かれていることだ。夕顔の話に限ったことではないけれど、源氏をあえてこんなに悪いように書いた紫式部の意図を知りたい。

上述のような意見を踏まえつつ、もっと踏み込んで紫式部（言語行為主体、またはテキスト）の意図について学習者に考えさせ、テキストと対話させていきたいところである。では、どうやってそれは実現されるのだろうか。残念ながら今年度の授業においてはその答えは出せなかった。今後の課題としたい。

以上みてきたように、夕顔の「心細く」の言葉を、源氏が「をかし」と捉えたことについて、「をかし」の意味に注目して考えることで、学習者はテキストの差し出す〈男君〉を正確に読み取り、また、そうした〈男君〉の書かれ方に着目して、紫式部の意図について考えようとしている。

夕顔が物の怪に襲われる場面だけでなく、「なにがしの院」到着後の場面を読むことで、学習者にテキストとの対話のきっかけを与えることができるだろう。

#### 4. 〈女君〉の『源氏物語』

先に源氏（男君）に注目して場面を読んできた。だが、『源氏物語』は源氏を主人公としながらも、〈女君〉に焦点を当てて読むこともできる物語ではないだろうか。

夕顔は頭中将とも恋仲になった女君であり、繰り返し登場する女君である。そこに読者に何かを考えさせようとする、テキストの仕掛けがあるのではないのだろうか。そう考え、今回の授業では「雨夜の品定め」の頭中将の体験談（新編「帯木巻」81頁2行目～84頁14行目）も教材として読んだ<sup>2</sup>。

読み取りのポイントはいくつかあったが、頭中将の話には「見ゆ」という言葉が多いことに注目した。

頭中将は、夕顔を「のどけきにおだしくて」と思い、頻繁に通うことをしなかった。しかし、夕顔は、「まめ

まめしく恨みたるさまも見えず」、「つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきもの」と思っていたようであったのである。頭中将に嫉妬していると「見せ」ない、または嫉妬深い女性だと「見られ」たくないのが夕顔であった。

では、夕顔の本心はどのようなものだったのだろうか。それは頭中将が夕顔をただ「見」ているだけでは分らない。「雨夜の品定め」における頭中将の体験談は、当然のことながら頭中将の視点から語られている。その語りからは、夕顔の自分に見せた様子や態度は語られているが、頭中将自身が心情を確認したり、尋ねたりといった能動的な関わりは語られていない。あくまで、頭中将は、夕顔が「見せる」姿を「見る」立場（中動態<sup>3</sup>）であって、その向こう側にあるかもしれない思いを能動的に知ろうとはしない。そうした態度は、頭中将が「わづらはしげに思ひまとはす気色見えましかば」と、逆につきまとう様子を「見せ」ていたなら違った結果になっていただろうと、夕顔が消息を絶ったことについて身勝手な言い訳を付け加えている点からもうかがえる。

一方で夕顔は頭中将に姿を「見せる」立場であったが、そこには主導権があったのだろうか。つまりは、自分の思いを正直に現すことができていたのだろうかということである。おそらくそれはできていなかっただろう。頭中将が語っているように夕顔はかいがいしく振る舞う様子を「見せ」ていた（「朝夕にもてつけたらむありさまに見えて」）のであって、頭中将（男君）の望む女君像を先取りして「見せ」ていたのだろう。先に頭中将はただ「見」ているだけと述べたが、そのまなざしは、「見」るだけで女君をコントロールするものだったのである。

では、そのように「雨夜の品定め」を読み、また夕顔巻を読んだ学習者は、夕顔についてどのようなことを考えただろうか。次にいくつか引用する。

夕顔は「雨夜の品定め」でも「夕顔巻」でも自分の気持ちをはっきりいえない性格で苦しんでいるなど思った。

夕顔の「山の端の」の歌や「心細く。」などの発言は、辺りが気味が悪かったということと引越しが急だったということだけでなく、過去の頭中将との辛い経験が思い出されたことが背景にあると思う。頭中将との場面における、自分が寂しく思っているということを伝えても理解されず、状況は変わらなかったという状況が、夕顔巻の源氏との場面と重なっている。また同じように自分の気持ちは無下に扱われるのかもしれないと感じる夕顔の不安が表れていると思った。

夕顔がかわいそうだと思った。頭の中將の所で本妻から嫌がらせを受け、また源氏と訪れた先で源氏を思う女からうらまれて、命を落としてしまうなど、運がないと感じた。源氏物語は女性である紫式部が書いたので、こういう女のドロドロとした部分も書けたのかなと思う。これが源氏目線がかかれていたから夕顔目線だとどうなるのか気になる。

引用した意見文には、物語では明確に語られていない夕顔の心中が書かれている。また、その心中をもっと知りたいという意見もみられた。

男君の欲望を内面化し、それを「見せ」ていた夕顔の心中は語られておらず、どのような意見も推測の域を出ない。しかし、学習者にとってみればそうした夕顔の心中は推し量りたいものとしてあるようだ。またそれを逆に言えば、そうした想像をかきたてるものとして夕顔は語られているということでもある。

また、夕顔の「生涯」について考える学習者もいた。

頭の中將との付き合いで、夕顔は嫌がらせを受け、さらにその話を聞いた源氏も結局は女性関係が原因で夕顔の命を奪ってしまったので、夕顔は二人の男性に振り回された生涯だったのだなどと思った。

このように読者は物語に繰り返し登場する女君を読むことで、その女君の生きた時間、つまり人生を想像することができるのだろう。

以上、学習者の意見を確認してきたが、夕顔巻だけでなく、「雨夜の品定め」も合わせて読むことで、夕顔の苦しみや不安の色合いや重みを細かに感じ取ることができる。つまりは、そうしたことが、テキストの仕掛けとして仕組まれているのではないだろうか。そして、その仕掛けをきっかけにして、読者は、例えば、次の学習者のように、〈女君〉の幸せについて考えていくのではないだろうか。

源氏物語は幸せになっている女性より不幸になっている女性の方が多くて読んでてつらい。男性と女性の恋模様をえがいた作品だし、いろんな出会いと別れがあってこそ…というのわかるけれど、もうちょっとみんなに幸せになってほしいと思う。

夕顔巻と合わせて「雨夜の品定め」を読むことで、テキストの仕掛けと出会い、その仕掛けをきっかけとして、テキスト（または言語行為主体＝作者）の思索に触れ、対話していく、そうした学習の可能性を学習者の意見からは見出すことができる。では、その具体はどのような

ものか。それについても今後の課題としたい。

## 5. おわりに

本稿では、『源氏物語』夕顔巻の教材化について、実際の学習者の意見を踏まえつつ考察してきた。

現行の教科書では、夕顔巻は夕顔が物の怪に取り殺される場面が多く採録されている。六条御息所の生き霊に取り殺されるというショッキングな結末を、巧みな情況描写によって書いている本場面は、たしかに読み応えもある。しかし、テキストが夕顔巻において問題としていることは他にあるのではないかとも思われる。その一つが、〈男君〉の女君理解のあり方であり、もう一つが、その男君によって不幸になっていく〈女君〉の人生である。こうしたことをめぐってテキストは思索し、その思索の材料を描写によって示し、読者に世界の問い直しを迫っているのだろう。

稿者は、こうした世界の問い直しを迫るテキストと学習者が対話することによって、学習者の思考がアクティブになり、その結果、認識が深化拡充すると考えている。では、その具体はどのようなものか。どのように授業を組み立て、学習者に思考させていけばそれは可能なのか。これまでも述べたように、それを今後の課題として取り組みたい。

また、青島麻子氏は、「物語では、作品を書き進めるうちに現れてきた課題を、別の作中人物に担わせて問い直すということをしばしば行っている」<sup>4</sup>という。夕顔巻で提示された問題は、今後どのように思索されていくのか。そうしたことも見通して、改めて夕顔巻を位置づけ、教材化していくという作業も必要だろう。そう簡単にいく作業とも思えないが、そうしたことが必要であることは念頭においておきたい。

以上、課題は多いが、テキストとの対話をめざした、夕顔巻の教材化として提案しておく。

## 註

\* 1 一方で学習者の中には夕顔を「シンデレラ」や「悲劇のヒロイン」と解するものもいた。男性主導の恋愛を正当化したり、ロマン化したりする解釈には注意したい。

\* 2 夕顔巻を採録している教科書では、「雨夜の品定め」本文の採録はなく、源氏が中流階級の女性に興味をもったきっかけや夕顔が頭中將のかつての恋人であったことが説明文に記されている。

\* 3 國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』（医学書院、2017年）を参考とした。

\* 4 青島麻子編『学びを深めるヒントシリーズ 源氏物語』（『源氏物語』について、10頁。明治書院、2019年）